

## 神様（川上弘美）

上田 慎也、野田 千鶴、初田 美紀、細川 智樹

### 一 作者と作品について

川上弘美は一九五八年四月一日に東京都に生まれる。五歳から七歳までは日本を離れアメリカで過ごす。日本に帰国後の小学三年生のときに病気で学校を一学期間欠席し、このときに家で児童文学を読み始めたことがきっかけで読書家になることを決意する。雙葉中学校、雙葉高等学校を卒業後、お茶の水女子大学理学部生物学科に入学する。お茶の水女子大学ではSF研究会に所属し、大学在学中よりSF雑誌に短編を寄稿、編集を積極的に行う。大学卒業後は高等学校の生物科教員などを経て、一九九四年には「蛇を踏む」で芥川賞受賞。新人賞を受賞。一九九六年には「蛇を踏む」で芥川賞受賞。

川上弘美の作品は高等学校における現代文の教材に多く取り上げられており、「神様」に関しては筑摩書房の『精選国語総合』、明治書院の『新精選国語総合』に二〇〇三年から採録されている。「神様」の他にも小説では「春野」（東京書籍『精選国語総合』二〇〇七年以降）、「離さない」（大修館『現代文2改訂版』二〇〇五年以降）、「水かまきり」（東京書籍『新編現代文』二〇〇八年以降）、随想では「境目」（筑摩書房『精選国語総合改訂版現代文編』二〇〇三年以降）、「春の憂鬱」（数研出版『国語総合』二〇〇七年以降）が採録されている。

### 二 叙述について

くまにさそわれて散歩に出る。

「熊」ではなく「くま」という表記にしたのは、書き手がくまに対して、獣というよりも人間に接するに近い感覚を持っていることを示している。この物語に出てこない「熊」と登場する「くま」で区別する意図があると想像できる。

散歩というよりハイキングにといたほうがいいかもしれない。

散歩とは、「気晴らしや健康などのために、ぶらぶら歩くこと」である。一方、ハイキングは「自然を楽しみながら野山などを歩くこと」である。わたしがハイキングといったのは、普通の人よりも自然に親しみのあるくまと一緒に、弁当まで持って出掛けることが「散歩」とは言いづらいからだと推測できる。

くまであるから、やはりいろいろとまわりに対する配慮が必要なのだろう。



「やはり」という表現から、わたしは、くまが身の回りに気を配っているのだろう、とかねてから察していたことがわかる。

どうやら助役はわたしの父のまたいとこにあたるらしいのである。

「どうやら」とあることから、わたし自身は助役のことをよく知らず、繋がりが薄いことがわかる。よく知った人が助役であれば、「なんと」といった表現を使うはずである。

どうも引越しの挨拶の仕方といい、この喋り方といい、昔気質のくまらしいのであった。

「引越しの挨拶の仕方」とは、引越し蕎麦を同じ階の住人に振り舞い、葉書を渡して挨拶したことを示し、「喋り方」とは、「縁」などと言って人との付き合いを大事にする昔風の考えを表した話し方のことである。これらのことから、わたしはくまが昔気質だという印象をもった。

そのくまと、散歩のようなハイキングのようなことをしている。

先程は「ハイキングと言ったほうがいいかもしれない」としてしたが、今はどちらとも言えないことから、現在の状況がハイキングの条件である「自然を楽しむ」ことをあまり満たせていないことがわかる。つまり、現在は自然の多いところを歩いていないのだ。

面と向かって尋ねるのも失礼である気がする。

わたしはくまに対して昔気質で真面目という印象を持っているため、安易に失礼な行動はとらない方がいいと思っている。

「今のところ名はありませんし、僕しかくまがないのなら今後名を名乗る必要がないわけですね。呼びかけの言葉としては、貴方、が好きですが、ええ、漢字の貴方です」

わたしとの距離感を縮めようとするなら、名を名乗り、名前で呼んでもらうのが妥当である。しかしそうしなかったのは、普通、人間相手にしか使わない「貴方」という呼び方をくまが好んだからである。名前で呼ばれると、ペットや動物園の動物と変わりなく、「貴方」と呼ばれることで、くまは人間に近い存在であろうと推測できる。

どうもやはり大時代なくまである。

「大時代」とは、大仰で古めかしく、現代離れしている様のこと。「昔気質」から「大時代」と表現を変えたことで、より一層、くまが現代では珍しい性格の持ち主であることが表現されている。

どの車もわたしたちの手前でスピードを落とし、徐行しながら大きくよけていく。

運転手がくまに驚き、恐れているため、ぶつからないように慎重に運転している。

くまの足がアスファルトを踏む、かすかなしやりしやりという音だけが規則正しく響く。

音だけが際立って響いているため、ふたりの間に会話がないことが読み取れる。

「暑くないけれど長くアスファルトの道を歩くと少し疲れます。」

「アスファルトの道を」の部分強調する話し方のため、くまにとつてアスファルト以外の道なら長く歩くことは苦ではないと推測できる。

遠くに聞こえはじめた水の音がやがて高くなり、わたしたちは川原に到着した。

段々川原に近づいていったことを水の音の高さが変わることで表している。

「そうだ、よくわかったな。」

誰が見てもすぐに熊だとわかるのに「よくわかったな」と言っている。さつさと早くこの場から離れたいと思いつながら適当に返事をしていく。そのあとに急いで逃げたりしないのは、わたしと並んで歩いているから安易に人を襲わないだろうというわずかな安心感もあるからだと思われる。

「いやはや。」しばらくしてからくまが言った。「小さい人は邪気がないですなあ。」

「いやはや」は落胆したときに発する言葉だが、この場面では、どうしていいかわからないくまの困惑の気持ちも読み取れる。また、「小さい人は」とあることから大人の態度を皮肉し言っていることがわかる。さらに、「しばらくしてから」とあるのでくまなりに言い方を考えたのだと思う。

くまの目にも水の中は人間と同じに見えるのであろうか。

「くまの目にも」とあるので人間とくまを区別していることが分かる。だが、くまから見た景色のことまで考えていることから、くまのことを意識し、知ろうとしている様子がうかがえる。

魚のひれが陽をうけてきらきら光る。

魚のひれに太陽の光が反射してきらきら光っている様子をそのまま描写している。しかしそれだけではなく、くまがくれたその魚に対してわたしが良いイメージを持ったことを暗に示している。

釣りをしている人たちがこちらを指して何か話している。くまはかなり得意そうだ。

「こちらを指して話している」とあるのでくまも釣りをしている人たちには気づいているはずである。くまが得意そうにしていることから、彼らの話している内容はくまにとって悪いことではないようだ。また、くまが獲った魚の様子から、彼らはくまに感心しており、そのような内容のことを話しているのだと予想できる。

取り出した布の包みの中からは、小さなナイフとまな板が出てきた。くまは器用にナイフを使って魚を開くと、これもかねて用意してあったらしい粗塩をぱっぱと振りかけ、広げた葉の上に魚を置いた。

小さなナイフとまな板、粗塩が予め用意されていたことから、くまは初めから川原で魚を獲り料理することを決めていたことが分かる。また、「器用に」ナイフを使って魚を開いているので料理は慣れている様子。

「もしよろしければオレンジの皮をいただけますか。」といい、受け取ると、私に背を向けて、急いで食べた。

一般的に熊は植物食に偏った雑食の動物である。そのため、普通、人が生で食べるのではないオレンジの皮を食べてもおかしくはない。「わたしに背を向けて」とあるのは、礼儀正しいくまが、オレンジの皮を食べるといふあまり行儀のいいとは思えない行為を見せるのを嫌がったため。

真面目に聞く。

なくとも文脈が成り立つのにわざわざ書いているということは、くまが尋ねたことがそれだけ筆者にとって印象的だったのだと思われる。

目を覚ますと、木の影が長くなっており、横にくまが寝ていた。タオルはかけていない。

「影が長くなって」ということは陽が沈みかけ、そろそろ夕方になる頃。くまはタオルをかけていないのは持つてきたタオルは一枚で、その一枚はわたしに貸したからだと思える。

「いい散歩でした。」くまは305号室の前で、袋から鍵を取り出しながら言った。

簡潔に答えているが、くまの率直な感想であり、わたしと散歩に行けたことを心の底から嬉しく思っている。また、「鍵を取り出しながら」とあるため、帰る直前にふと心で思ったことが声に出たのだと考えられる。

「またこのような機会を持ちたいものですな。」

「このような機会」とは、わたしと共に行った散歩・ハイキングの様なものの実現を指す。「また」とあることから、それだけくまが楽しめたという思いを持っており、再度実現を望んでいることが分かる。「くですな」といった言い回しには大時代なくまらしさがにじみ出ている。

わたしも頷いた。

「も」とあることから、わたし自身くまと同じように、再び散歩のようなものが出来ることを望んでいることが分かる。そして、あえて「そうですね。」などの言葉で返答しなかったのは、わたしが心の底からくまの言葉に賛同していることを表していると考えられる。

それから、干し魚やそのほかの礼を言うと、くまは大きく手を振って、「とんでもない。」

と答えるのだった。

「大きく手を振って」とあるのは、礼を言われたことに対しての表現であり、あくまで自分（くま）が誘った散歩に来てもらったのだという、くまの相手に対する配慮が感じられる。

「とんでもない」とは

1. 思いもかけない
2. もつてのほかである
3. 滅相もない

ここでは、3の意味で使われており、相手からの礼に謙遜している。

「では。」

ここだけわたしの言葉に「」が付けられている。これは、冒頭から今まではくまとの心の距離があったため、「」なしで語り手メインの表現しかなされていなかった。しかし、散歩を終えて、わたしがくまに対して少なからず親しみを持ったという心情変化の表れに伴い、くまと面と向かって発した言葉が「」付きで書かれたのだろう。つまり、この「」を用いることで、小説内の空気を換える役目を果たしている。

次の言葉を待つてくまを見上げるが、もじもじして黙っている。ほんとうに大きなくまである。

次に出てくるお願いに対する遠慮や恥ずかしさのためにはつきりした態度がとれないでいる。「見上げる」や「本当に大きなくまある」との言葉から、初めに感じた印象に引き続き、くまと向き合うことで改めてくまのサイズを確認し強調している。

「こうして言葉にならない声を出すときや笑うときは、やはり本来の発声なのである。」

長い時間「人間らしい」くまと接していたため、くまが動物の「熊」という認識が薄れかけていたものの、「熊」の一面を備えていることを実感している。

「やはり」とあるのは、さまざまに考えてみてくまは「熊」だという結果は変わらなかったである。

「抱擁を交わしていただけですか。」

くまは言った。

「親しい人と別れるときの故郷の習慣なのです。もしお嫌ならもちろんいいのですが。」

先程くまが「もじもじ」することになった原因ともなる「頼みごと」である。くまは、一日ほどこそ一緒に過ごしてないわたしを「親しい人」と認識している。だからこそ、その別れを惜しみ故郷の習慣を用いることで、わたしの存在と一日の散歩の記憶をくまの心の一部として残しておきたいと思っている。しかし、「もしお嫌なら」とあるように、相手に自分の気持ちを押し付けないように気遣う素振りもみせている。

わたしは承知した。

何の躊躇いもなくくまの頼みごとを受け入れたのは、くまの真摯な気持ちわたしに伝わってきたからであろう。そして、くまがわたしを「親しい人」と認識したように、わたしもくまを「親しいもの」として認識したといえる。

思ったよりもくまの体は冷たかった。

「思ったよりも」というのは、予想していたよりもということ。恒温動物で毛皮があるくまの体は、実際には冷たくはない。しかし、主人公の「私」は、もう少し熊の体が温かいものだと思っていたために出た言葉であるといえる。

「今日はほんとうに楽しかったです。遠くへ旅行して帰ってきたよう



な気持ちです。熊の神様のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように……」

「ほんとうに」は心底の意。「遠くへ旅行して帰ってきたかのような」は比喩表現であり、旅行してきたくらいワクワクして私との時間が満足いくものであったことを暗示している。また、ここでの「熊の神様のお恵み」とは、本文では明記されていないが、「この世界にはいろんな神様がいて、自然のなかで人間と共存して、恵みをあたえてくれる」という認識は古来より、日本書紀にもみられる。そのことから、くまは自分にとって「親しき人」である「私」にそのような恵みが降り注いでほしいと心から祈り、別れの言葉としたのであろう

熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった。

「考えてみた」ではなく、「想像してみた」とあるのは、非現実であったために心の中で思い描く必要があった。「見当がつかない」とあるので、想像をめぐらしてみても全く分からなかったのである。

悪くない一日だった。

あえて、「良い一日」と言わないのは、最初にくまとの散歩に期待していなかったが、予想以上に良い散歩ができた感情からきている。

### 三 考察

#### (一) くまとわたしの距離感について

この作品を読むにあたり、くまとわたしの距離感の変化は大変重要である。

くまは最初、わたしに対して引越し蕎麦を振舞うなどしていたが、同じ階の住人にも振舞っていたため、わたしに対して特別な行為をしたわけではない。つまり、このときの二人の関係はただの同じ階に住む住人である。

蕎麦を受け渡す場面で、くまがわたしの遠縁の知り合いだとわかる。このとき、くまはわたしとのつながりを認識し、親近感を抱く。わたしは、遠縁のことも含めて、くまについて知らないことばかりだが、「昔気質のくまらしいのであった。」とあることから、くまの喋り方などから性格を知ろうとしていることがわかる。

その後、散歩中にわたしはくまの呼び方に困り、何と呼んだらいいか問う。するとくまは、「貴方」がいいと言う。普通、「貴方」という呼び名は人間相手にしか使わないことを考えると、くまはわたしに人間に近い存在として見てもらいたかったのではないかと思われる。つまり、くまはいち人間同士としてわたしと付き合うことを望んでいる。

他愛のない会話をしながら川原まで歩いていると、わたしとくまは男性二人子供一人の三人組と出会う。このとき、ふたりの男性はくまと顔を合わせようとしなかったり、立ち尽くすだけである。

一方でわたしはくまと二人で散歩のようなハイキングのようなことをしており、会話もしている。男性二人のくまに対する描写は、一般的な人がくまと出会ったらどうなるかを表現し、わたしの置かれている状況が特異であること、さらには二人の親密さを表している。

くまが魚を獲る場面で、わたしは「くまの目にも水の中は人間と同じに見えているのであろうか。」と考える。わたしがくまの目線に立って物事を考えていることから、わたし自身、くまに関心を持っていることがわかる。

くまが魚を獲り終えた後、持参のナイフやまな板を使って手際よく調理する。このとき、調理道具があらかじめ準備されていたことを考えると、くまはわたしに喜んでもらい、少しでも距離感を縮めていきたいと考えていたのではないかと推測できる。

別れの場面で初めて、わたしの台詞に「」が使われる。この表記の変化は、二人の間に明確な会話の成立があったことを示していると思われる。この時点で二人は会話を成立させるほど仲良くなっており、くまが最後に申し出た「親しい人と別れるときに行う抱擁」についてもわたしは了承している。最終的にわたしは、くまに「親しい人」と認識されても苦ではないほど親密になっている。

以上より、わたしとくまの関係は、この散歩のようなハイキングのようなことを通して親密になっていくことがわかる。

### (二) くまの表記について

物語の中で、「くま」の表現は平仮名の「くま」と漢字の「熊」の二種類がある。

「くま」はわたしと散歩に出掛けたくまのことであり、作品の中で、「くま」は、くまの名前のような役割を果たしている。

一方、「熊」は一般的な動物の熊を指しており、「熊の神」という表現は、「数多く存在する熊が崇める神様」という解釈になるため、「熊」という表記が妥当なのである。

また、子供が「お父さん、くまだよ。」「くまだよ。」「ねえねえくまだよ。」と「くま」の表記で発言していることから、作品中の表記上の区別として「くま」「熊」の使い分けがされているのだろうと推測できる。

### (三) 「神様」というタイトルについて

この作品のタイトルは「神様」であるが、「神様」という単語が出てくるのは物語の終盤、「熊の神様の恩恵が…」と「熊の神様とはどのようなものか」の二か所だけである。さらに、わたしは熊の神様について想像を巡らす「見当がつかなかった」としている。つまり、作品の中で熊の神様について詳細を語っておらず、読者に想像の余地をふんだんに残したまま完結しているのだ。

アイヌ民族の中で古くから伝わる儀式に、熊を祭るものがある。また、北欧神話にも熊が登場するなど、熊は神に近い聖なる動物であるという見方は根強い。

ここで、わたしの前に現れた「くま」が神様、あるいは神様の使いであると仮定すると、わたしは神様と一日を共に過ごしたことになる。神様はわたしに魚をくれたり、気を配ったりとあらゆる手でわたしに尽くしてくれる。その結果、神様と抱擁するまでに打ち解けるが、わたしは熊の神様という言葉については見当もつかない。これは、神様と共存しているように見える私たちが、神様の本質やその深部について理解が及んでいないことの隠喩ではないだろうか。

また、わたしはくま（神様）と打ち解けたのに対し、男性二人は打ち解けられなかったことは、神様についてそれぞれ感じ方が違うこと、つまりは宗教の多様性についても表現していると読み取れることもできる。これはあくまでもひとつの見解であり、読み手によって様々に「神様」を解釈できる。

作者・川上弘美氏はこの作品で数多くの賞を受賞している。このことから考えても、この作品はただ単純にわたしがくまと散歩するだけ

の話ではないとわかる。この作品を通じて考えられることは数多くあり、最大の謎はやはりタイトルを「神様」とした理由である。授業を展開していく中で、タイトルの謎について有意義な議論ができるよう、工夫していきたいものだ。

